特集

すすんで読書する子を育てる

昨今読書指導の充実を国語科に求める声が高まっています。この特集では、自らすすんで読書する子どもを育てるために何が必要なのかを、国語科の指導と環境づくりの観点から提案します。

本の世界をひらく読み聞かせの魅力

群馬県高崎市立倉賀野小学校
髙橋　美保

一　はじめに

すすんで読書をする子どもを育てるためには、子どものニーズに合った、心に響く本をたくさん紹介することである。そのためには、読み聞かせは大変有効であると考える。

読み聞かせは、読み手を仲立ちにして、子どもたちが本と出会う場である。また、本を読み聞かせてもらうことによって、子どもたちが、そこから「何か」を感じたり考えたりしながら心を豊かにしていく場である。

そこで、学校では、授業中はもちろん、朝や帰りの会、放課後を使って、読み聞かせを工夫し、さまざまなジャンルの本を扱うことが大切である。

二　読み聞かせの魅力

読み聞かせには、温かさがある。読み手の音声を通して、その人柄や体温が伝わってくるようである。読み手と聞き手は、読み聞かせという活動を通して、ゆったり優しく流れる時間を共有することができる。

読み手の楽しみは、子どもたちの反応である。同じ学年でも、学級によって雰囲気が全く違う。同じ本を使って読み聞かせても、反応が違うからおもしろい。特に、低学年の子どもたちが、本の中で繰り返される決まったフレーズに気付き、読み手が「どうぞ、言って」と目で合図したときに、一斉に子どもたちがそれを声に出す瞬間は、読み手と子どもたちとの一体感を感じるときである。

そして、読み聞かせの主役は本である。読み手は、決して本の邪魔をしてはいけない。したがって、極端な演出や声色は使わない。聞き手の表情や反応を確かめながら、声の強弱・間の取り方・速さを調節したり、ページをめくるタイミングを工夫したりする。読み聞かせは、ともに読んでいる本のよさを、読み手の声を使って、まるごと子どもたちに伝えるものである。

三　読み聞かせの工夫の実際

（一）教師による読み聞かせ

①実物投影機を使って

私のクラスには、同僚教師手作りの実物投影機がある。ズーム機能も付いているので、拡大投影機にも早変わりする優れ物である。

実物投影機は、授業や読み聞かせのときは、本に描かれた挿絵や写真を見せるために役

立っている。『アリからみると』（桑原隆一／文　栗林慧／写真　福音館書店）の本には、アリから見た昆虫が迫力満点に写っている。

そこで、ズーム機能を使ってさらに細部を映す。すると、新しい発見がたくさん出てくる。読み聞かせの際に、本の挿絵や写真から、情報を読み取ったり想像を広げたりするためには、実物投影機の効果は抜群である。

②大型絵本を使って

大型絵本の読み聞かせは、子どもたちが楽しみにしている活動の一つである。大型絵本は、市町村の図書館で借りられる。読み聞かせには、大型絵本と通常の絵本の二冊の本があるとよい。人数も二人必要である。一人は、大型絵本のめくり手、もう一人は、通常の本を使って読む読み手である。その際、くれぐれも一人二役は避けたい。絵本が大きいため、ページのめくりそこねや、読み手の体や手が聞き手の視界を遮ることがあるからである。

右…実物投影機
下…実物投影機を使った読み聞かせ

かつて『うさぎのくれたバレエシューズ』（安房直子／文　南塚直子／絵　小峰書店）を読み聞かせたことがある。そのとき、子どもたちに、表紙と裏表紙を見開きで見せたところ、歓声が上がった。この本は、表と裏表紙で一枚の絵になっている。そこには、大きな美しい桜の花びらと女の子とうさぎたちが幻想的に描かれていた。子どもたちは、本の魅力ある世界に確実に引き込まれていった。

（二）子ども同士の読み聞かせ

子ども同士の読み聞かせでは、子どもが読み手となり、本を読み聞かせる楽しさを直接体験できる。聞き手から、笑顔や「楽しかった」という声が返ってくるときはうれしいものである。広い意味で読み聞かせは、本という媒体を通して、子ども同士のコミュニケーションを図る一つの手段にもなり得る。

業前活動で、図書委員会の高学年の子どもたちが、各クラスに読み聞かせに入ることがある。特に低学年の子どもたちは、上級生から本を読んでもらえることを、とても楽しみにしている。読み聞かせは、単なる文字の音声化ではなく、本の内容を通して読み手の温かい心を、聞き手に伝えるものだからである。

また、同じクラスや同学年の子ども同士で、お気に入りの本を読み聞かせることも、読書の世界を広げていく上で有効な手段である。同学年の友達がどんな本を読んでいるのか、今どんな本に人気があるのかを知る上でも、絶好の機会である。

（三）ボランティアによる読み聞かせ

多くの学校では、読み聞かせグループや保護者、地域の方などにお願いして、業前活動や休み時間、国語の授業などで、読書指導の一環として、ボランティアを取り入れている。

子どもの扱いをよく知っているお母さんやおばあちゃんなど、ボランティアによる読み聞かせは、絶大なる安心感と信頼感をもって子どもたちに好意的に受け入れられている。

四　おわりに

読み聞かせは、魅力ある本の世界をひらくきっかけとなり、考えや想像力、コミュニケーションを広げる楽しい活動である。子どもたちには、これからの生活の中で、これらの読み聞かせの経験を思い出し、その時々のニーズに合わせて本を探し求めたり、積極的に新しいジャンルの本に挑戦したりして、本を自分で選んで読める子になってほしい。

たかはし　みほ　「群馬・国語教育を語る会」「声とことばの会」所属。学び合いと交流活動を通してことばの力をはぐくむ授業づくりを実践している。